

思考力・判断力・表現力を育てる社会科における言語活動の充実：  
「伝える力」「伝え合う力」を育てる授業づくり

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-04-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤原, 啓子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00007234">https://doi.org/10.14945/00007234</a>

# 思考力・判断力・表現力を育てる社会科における言語活動の充実

## －「伝える力」「伝え合う力」を育てる授業づくり－

藤原啓子

### 1. はじめに

未来のサッカー選手を育成するために、日本サッカー協会では個々の選手の言語力を鍛える教育を始めている。技能面は向上しつつも、海外チームとの決定的な差とされているものが日本人のコミュニケーション能力の低さである。自分のプレイについて、チームメートに言葉で伝えられる論理的思考力がなければ、チームとしてのまとまりは得られず、向上できないという見解からだ。2010年のワールドカップ後、海外チームに移籍した選手たちは、プレイ技術のみならず、そうした対話を積み重ねたチームづくりということも学んでいるにちがいない。

平成20年3月に告示された新しい学習指導要領では、その改訂における配慮すべき重要事項の第一として、各教科・領域等における言語活動の充実を挙げ、小中高すべての段階でその重要性を明示している。人と人とのコミュニケーションにおける「言葉の力」はとても大きなものであり、一人ひとりの認識や思考力、判断力も「言葉の力」抜きでは成立しない。授業改善の視点として、言語活動に注目した背景には、人間関係が希薄化した実社会の動きも密接に絡んでいる。まさに、今回の改訂では、「確かな学力」を基盤とした「生きる力」の育成と「確かな学力」「豊かな心」を支える「言葉の力」を重視することにより、すべての教科を言語という切り口から見直そうとしている。自ら「伝える力」と自己と他者とが相互に「伝え合う力」を伸ばしていけるかどうかは、教科の枠をこえ、どれだけ職員全体が学校生活の様々な場において「言葉の力」を意識し、子どもたちを育てようとしたかによる。言語活動の充実を図ることは、授業のみならず、学校生活全体を豊かにし、活性化するものであると考える。

### 2. 研究の目的

授業は学校生活の要であり、「また来たくなる学校づくり」の基盤でもある。現場の問題意識から生まれた各校の「目指す生徒像」を実現するためには、やはり日々の授業改善は欠かせない。本研究ではH中の研修課題と目指す生徒像を受け、思考力・判断力・表現力のすべての土台となる言語力を高めるための手法を提案することを目的とし、そしてそれがH中全体の授業づくりや学級経営の視点にもつながっていくことを目指した。

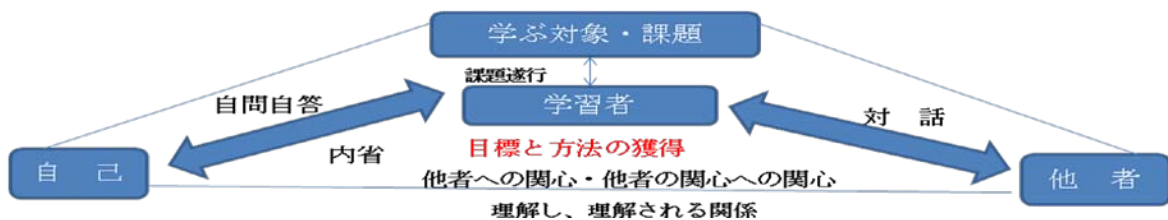


図1 協働的な学びにおける視点

### 3. 研究の方法

本研究は、主としてアクションリサーチによって行われた。具体的には平成22年4月から12月までの期間、H中学校に滞在し、主に1年生の学年集団につきながら、授業と校内研修に関与

した。S教諭との協働による授業づくりの中で、自らも社会科の授業を中心に授業実践を行い、言語力を高めるための手法の検証を進めていった。第1段階として、研究協力者のS教諭が担当する1年生の学年集団につき、授業及び学校生活全般の観察、校内研修への参加などを通し、まずはH中生徒の実態と研修態勢の把握に努めた。第2段階として、夏季休業中に1学期の授業の省察を行うとともに、歴史的分野「中世」の一単元の授業構想をS教諭と共に立て、2学期にその授業実践を行った。S教諭とお互いの授業を見合うこと、また協働による一単元の授業づくりを通して、1時間1時間の省察を共に行い、次に生かす手立てを考えていった。そして、授業観察、生徒のワークシートの記述内容の評価、事後アンケートなどから、個々の子どもたちの「伝える力」「伝え合う力」がどのように変容していったかを分析していった。また、学びの文脈を知るために校区の2校の小学校に出向いたり、校内研修でH中職員全体に自分たちが行ってきた実践を紹介したり、市内の社会科部員の先生方にも意見を求めたりするなど授業づくりのネットワークを広げ、今後の教育活動につなぐ基盤づくりを行った。

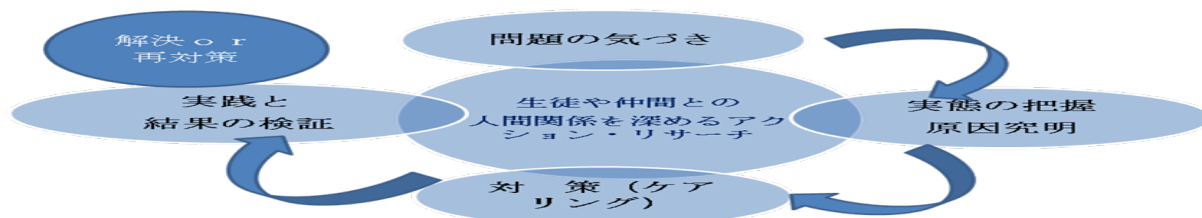


図2 本研究におけるアクションリサーチ

#### 4. 意味ある言語活動にするために

##### (1) これまでの社会科における言語活動の見直し

社会科で育てたい「思考力・判断力・表現力」は社会的な事象や問題を読み解く力と置き換えることができる。言語活動はこれまでも社会科の授業の中で行われてきた。しかし、これまで育ててきた力が、思考や判断をともなった社会科の本質に迫るものであったかという点、まだまだ不十分であったように思う。特に自分の考えを論述させながらも、意思決定への過程を急いだあまり、結果として、子どもの思考に添っておらず、根拠づけや決定に基づく行動の部分が曖昧になってしまった時があったのではないだろうか。論述力とは物事を、筋道を立てて考え、記述する力である。その中の筋道を立てて考える力について、藤田伸一は「相手にわかりやすく伝えるためには、どのように表現したらよいかを考える力」「相手を納得させるためには、どのようなデータを用意し、理由づけすればよいかを考える力」という2つの要素を挙げて説明している(藤田, 2007)。これまで自分がしてきた実践は、まだまだ「伝え合う力」という部分で不十分であったことを感じる。また、「わかる」ための活動の部分でも、事象の特色や事象間の関連を説明するところ、で、「どうして、なぜ？」の問いかけはしていても、その背後の関係性を見つけ、説明させる過程で、もっと子どもに考えさせる時間を確保し、複数の違う視点の資料を示すなどして、心の揺さぶりをかける部分をもっとあってもよかったのではないかと思う。教師の思いだけが空回りして活動だけで問がないものがなかったか、5W1H(When, Where, Who, What, Why, How)を聞きつつも、揺さぶりをかけるべきところで粘り強く向き合っていたかなど、反省材料は多々ある。本質的な問いを導きだし、切実感のある課題設定をし、生徒の考えを社会的に意義あるものへと転換できるのも教師の力量次第である。

## (2)個々の言語技術に注目する訳

### ①欧米の言語教育

国際社会で今、一番求められている力は世界に通用するものの考え方と堂々と自分の意見を主張できる発信力である。欧米では論理的に思考するためのトレーニングを小さいころから積み重ねている。母語教育は、実社会で必要とされる言語技術に直結し、一人の人間が社会で働いていくために必要な言葉の技術を教育課程の中で積み上げられ、訓練されているという。欧米ではこれを言語技術、コミュニケーションスキルなどと呼んでいる。日本でも近年、関心が高まりつつあるメディアリテラシー教育も欧米ではもう 20 年以上前から取り上げられてきている。この歩みの差こそ日本人が国際社会でなかなか溝をうめることができない力の差なのかもしれない。

### ②つくば言語技術教育研究所との出会い

つくば言語技術研究所三森所長は著書『論理的に考える力を引き出す』の中で「相手の言っている事を理解し、自分の意見を述べ、両者の違いをなるべく狭めて接点を探しだし、共に満足できる結論に導くこと、あるいは一緒にプロジェクトを作り上げていくことは生活と仕事の基本であり、そのためにコミュニケーション能力は不可欠である」と述べている（三森, 2002）。2010年6月には、この研究所が連携協力している千葉県の上野中学校・高等学校の「言語技術科」の授業を参観した。また、同年7月にはこの研究所で行われた教員向けの研修会にも参加し、「言語技術」を教えるための具体的な技法を体験から学ぶことができた。全国各地から教員が集まってきた参加者の多くは国語科担当であった。しかし、ここで学んだ「言語技術」という考え方と様々な手法は自分の専門教科である社会科は勿論、学級経営の上でもとても役に立つ視点であった。言葉の教育は、すべての教科、領域にかかわることであり、日常のさりげないことからできることを改めて感じる事ができた。

### ③授業における言語技術

思考力・判断力・表現力はすぐに身につくものではなく、積み重ねによるものである。言語活動の充実化が重要視されても、聞く・読む（受信）→思考する・想像する→書く・話す（発信）という一連のプロセスのうち、何かを変えていかなければ、結局のところ体裁だけを整えていることになる。言葉の教育を進めることは、「確かな学力」と「豊かな心」の基盤となる「言葉の力」を育てることを目指すことである。「聞く」「読む」「話す」「書く」ことを通じて、生徒にどのような技能や考えを伝える力をつけさせたいのか、指導のねらいを明確にした意図的、計画的な取り組みが求められる。そのために、根本にある個々の子どもの言語技術はいかなるものかを教師がまず把握し、必要に応じてノウハウを教え、土台をつくってあげなければならない。思いつきで説明するのではなく、情報を整理し、考えを組み立て、根拠を示して説明できる力を育てたい。実際のところ、「まとめてみよう」「考えてみよう」「伝えてみよう」と指示しても、机間指導をすると、何をどうすればいいのかわかっていない生徒もおり、今一度、学び方、調べ方、伝え方など学習に必要な基本スキルを確認していく必要性を感じている。小学校でやってきているだろう、前の学年でやっているだろうではなく、その場その場で教え確認する姿勢を常にもちたい。広島県や京都市立御池中校区、県内では沼津市など、言語活動の充実化を図る先進的な取り組みに今後も注目し、参考にしていきたい。

## 5. 言語活動の充実を目指した授業実践

### (1) S 教諭との協働による授業づくり

S 教諭の授業は生徒から「分かる楽しい授業」として支持されていることが授業観察や1学期末に行った抽出3クラスのアンケート調査によく表れていた。また、アンケート調査では小学校6年生の時よりも社会科の授業に積極的に参加できるようになったと感じている生徒が93%にも達しており、S 教諭が子どもたちの関心・意欲をうまく引き出していることがわかった。このS 教諭の授業スタイルを活かしつつ、これまでの言語活動の見直しと新しい取り組みも意識し、歴史分野「中世」の授業デザインを考えた。また、お互いの社会科観を知る意味でも生徒に配布する「社会科の学ぶ意義」も交換し合った。(授業づくりの視点は、最終頁のまとめを参照)

The collage contains several key documents:

- Lesson Plan (Left):** Titled '歴史的分野 ～中世の日本①～ 言語活動を充実した単元構成その1～'. It details the structure of a 10-lesson unit on the Middle Ages, including objectives, materials, and activity descriptions.
- Worksheet 'Round 2' (Middle):** Features a 'North-South Exchange' activity. It asks students to compare their own region with others, exchange opinions, and then reflect on their own thoughts after the exchange.
- Worksheet 'Jigsaw Learning' (Right):** Focuses on the 'Kamakura Period' (鎌倉時代). It includes a table for identifying the cultural characteristics of four periods: Heian, Kamakura, Muromachi, and Edo.

時代	特徴
平安時代	和歌、物語、源氏物語、平家物語、源氏物語、平家物語
鎌倉時代	足利三代義満、室町幕府、室町幕府、室町幕府
室町時代	足利三代義満、室町幕府、室町幕府、室町幕府
江戸時代	徳川幕府、徳川幕府、徳川幕府、徳川幕府

◎中世の単元のワークシートの一部 (この単元で 10 枚使用) 毎回、赤ペン指導も大切に行った。6 クラス分のワークシートの記述をA～Dで評価

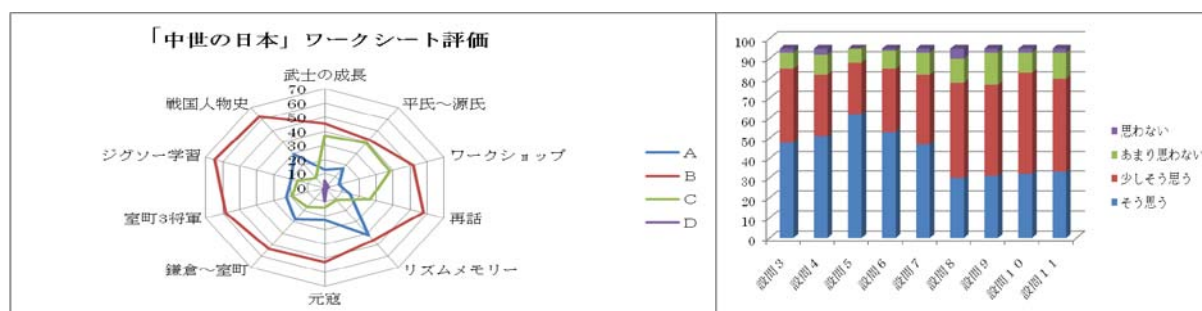
- ◆中世の単元で実践した言語活動
  - ◎全授業に関係するもの
    - A : 資料分析 B : 「どうして、なぜ？」の発問に対する応答 (根拠を明らかにして説明)
    - C : ペアまたは班 (3～4) による話し合い、伝え合い (説明)
    - D : 本時のまとめ (わかったこと、感じたこと等 具体的に記述)
    - E : ワークシートへの記述 F : 復習のノート整理 (家庭学習)
  - ◎特徴のある言語活動
    - G : ワークショップ型学習 (承久の乱) H : 再話 (御恩と奉公「鉢の木」)
    - I : リズムメモリー (鎌倉仏教と鎌倉文化) J : ジグソー学習 (4時代の文化の特徴)
  - ◎モデリングを示した後のレポート課題
    - K : 戦国大名、戦国大名をとりまく人物たち個人課題 (調査→交流)



	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K
◇受け答えをする技術		●	●				●			●	●
◇要点をまとめる技術		●	●	●	●	●	●	●		●	●
◇構成を考える技術					●	●		●	●	●	●
◇様々な角度から物事をみる技術	●	●	●				●		●	●	●
◇情報を正しく伝える技術	●	●	●				●	●	●	●	●
◇情報を的確に分析する技術	●	●	●	●			●			●	●

図3 中世の単元における言語活動の位置づけ

(2) ワークシート評価と事後アンケートからの分析



学習過程の明確化は言語活動を充実させるためにも必要不可欠なことであった。また、子どもの思考の流れやつまずきにも寄り添い、そこでのひと手間が子どもの自主的な学びにつながる。グループ活動においても、何のためにこの活動をやるのか、「場」の設定を明確にすることで、子どもたちの目的意識と相手意識も高まる。基本となる学び方、話し方、まとめ方等を教え確認し、子どもたちの学ぶ土台づくりをしていくことで子どもたちの動きは少しずつ変化が見られた。「話すこと」と「書くこと」は両輪でありどちらもおろそかになってはならない。学習過程に工夫を凝らそうとする教師の思いは子どもたちにも十分伝わっていた。一人でも多くの生徒に社会科を好きになってもらえるよう、1時間1時間の授業をより一層大切にしていきたいという思いが強まった。

6. 研究のまとめ ～言語活動を再構築した授業改善～

①基本は「どうして?なぜ?」の問答

基本は「どうして?なぜ?」の問いかけであり、それに対して、「なぜならば」と根拠を示して答えることである。論理的思考を鍛えるためには、教師が子どもをよく観察し、子どもたちから引き出してあげることが大切である。これまでうまくいってなかったことが、うまくいった時に真っ先にほめてあげられる教師でありたい。

②目的意識がはたらくゴールの設定

他人に説明することなど、発表することを予め意識させ、言語活動に取り組ませることは、子どもたちがゴールを見据え、課題意識をもって主体的に取り組むことにつながる。「学び方」を教え確認しつつ、子どもたちがゴールに向け、着実に進めるような支援をしていきたい。本来、子どもは「伸びたい」「分かってほしい」気持ちがあることを我々教師は忘れてはならない。うまくいかなかった時こそ、厳しい目で自分の授業のどこがまずかったのか謙虚に反省する姿勢がほしい。

自らにも言い聞かせ、毎年、授業力が向上していけるような教師でありたい。

### ③切実感のある課題設定

各教科の特性は異なるが、子どもたちにとって切実感のある課題とは、やはり、日常生活と結び付いたものではないだろうか。身近な話題を取り入れ、自分の知識と結びつけて考えさせることは、その教科を学んでいる意義にもつながる。身近な素材を見つけ、授業に生かせるかどうかも教師の力量である。

### ④視点を変えて見る

授業でも生徒指導でも、時には視点を変えて、考えてみることも大事なことである。聞き上手の先輩の先生方は、相手に伝える力にも優れており、この魅力が同僚や生徒たちから慕われる力であると感じている。その土壌には、広い視野があり、多くのことを吸収し体験してきている。視点を変えられるかどうかは、自分次第である。

### ⑤活躍の場のチャンスを与える

自分から率先していろいろなことに挑戦できる子もいれば、なかなか自分では判断できずに動けない子もいる。活躍の場を意図的に設定してあげることは子どもたちの将来にわたる学びにつながってくるように思う。また、こうした授業を支えるのは学級の耕しである。全体でも、班活動の場でも、失敗や多様性が認められる文化が育った学級づくりをしていきたい。

### ⑥言語技術の向上は教師の指導力の向上

本研究を通して、言語技術に着目して授業を見ていくことは、私たち教師にとっても指導力の向上につながるということを感じた。自分の発問は明確であったか、板書は構造化されており、1時間の流れがわかるものになっていたかなど、教師自身も改めて自分の発する言葉、自分が表現したものに対して、責任をもてるようになると思う。子どもに求める以上、自分たちも豊かな言語力を鍛えていかなければならない。そして、文部科学省が示す「職業的発達にかかわる諸能力」にもつなげ、将来の生き方に結び付くような言語活動、言語教育でありたい。

## 7. おわりに

企業が若手社員に求めている力は、我々、現場の教員にとっても、子どもたちがもっともっと身につけていかなければならない力を示唆しているように思う。先輩の先生方は勉強会の機会があるとよく誘いをかけてくれる。しかし、気がつけば自分も後輩たちを指導する立場の年齢に達している。実践者同志がもっと気軽に自分のやったことや考えていることを持ちより、交流できる場を私も先輩たちがしてきたようにこれから先頭に立ってつくっていったらと思う。どこまでやったから終わりということではなく、目の前の子どもが変わり、絶えず動いている世界の中で、私たち自身も学んでいかなければならないことは限りなくたくさんある。私自身、これまで小中高の教職経験があるが、最終的に中学校を選んだ理由は、中学校社会科ゆえの魅力を強く感じているからである。2年間の学びを終え、今、はっきり言えることは自分が「社会科」という教科を本当に好きであり、一人でも多くの子どもたちに社会科のもつおもしろさを知ってもらいたいと思っていることである。「また来なくなる学校づくり」を組織の一員として全力で取り組んでいきたい。やはりその要となるものは授業である。いくつになっても学ぶ姿勢を大切に、子どもたちの意欲を引き出し、子どもたちにたくさんの喜びを与えてあげられるような教師でありたい。